



令和6年6月24日

研修だより 18号

## 課題と笠小ルーブリックの繋がり

小笠原康晃

校内研修で進めている「かるまふ」の取り組み。  
日々の授業の中で実践してくださり、ありがとうございます。

様々な学級での実践を見せていただき、感じたことがあります。

「どのように～か。」という課題に対する  
笠小ルーブリックは「～ができる」でよいのか、ということです。

わたしも、以前は次のように子どもたちに示していました。

課題「どのように計算すればよいのだろうか。」  
笠小ルーブリック「計算ができる」

ずっとこのように示してきましたが、先生方の授業を拝見する内に「課題に正対していないのではないか」と考えるようになりました。

「どのように計算すればよいだろうか」という課題に対するゴールの姿は「どのように計算するか考える」ではないかと考えるようになりました。

課題が「思・判・表」に関係することなのに、ゴールの姿が「知・技」になっていました。

このズレを最近になって気付きました。

授業で子どもたちに例示する「ゴールの姿」が、課題に正対していないと、授業自体がずれてしまうと感じました。

課題と笠小ルーブリックのずれは起きがちです。

授業のゴールが「知識・技能の習得」なのか、「思考力・判断力・表現力の育成」なのか、で課題と笠小ルーブリックは違ってきます。

課題、笠小ルーブリック、まとめはそれぞれ対応しています。  
もう一度自分で見つめ直すことが、授業改善に繋がると感じました。

今月は授業教科月間です。  
この期間を、授業を見直すきっかけにしてくだされば嬉しいです。